

は犠牲が無かった。我々自身も郷土部隊の九師団は、日本軍の最強師団だと自負していたからです。

次に台湾での状況ですが、住民との関係は割と良かった。中隊長は現地で結婚した。戦後の住民関係も変わらなかった。食料についても、敗戦前も後も余り変わらない。米も野菜も、肉、魚、甘味、果実もあったのだから、恵まれた戦中、戦後だったといえ、他の方面の話の聞くとか何か申し訳ないような気がする。

私は有難くも復員出来たが、心配していた満蒙開拓義勇隊の仲間には皆引揚げることが出来て良かった。私の復員は、昭和二十一年二月二十七日で、外地部隊としては早かった。しかし、当時内地には勤め先も少なく、天職である農業を現在までやっています。今考えても、農業をやった方が良かった。恩給より年金より、一日一日元気で天職を努められることの幸せを感じています。

毎年、台湾の同年兵会をやるが、私は農業をやっていて良かった。勤め人は退職し、年金は女房が握り、生活設計の中に入っているので「お前が一番幸せだ」

といわれる。農業をやっていたら、早寝、早起きで健康にも良いし、土地の上に足を着け、自然の中で、土地で生活すること、私も一番幸せ者だと思っています。

暗号将校が

少年飛行生徒の教育

香川県 鎌倉繁治

大正九年五月七日、香川県木田郡三木町大字鹿庭に生れ、当時は祖父、両親、姉一人、妹二人、実家は雑貨商を営む。昭和十五年徴集で、第十一師団歩兵第十二連隊に現役兵として入営が決定しましたが、当時部隊は満州第九三六部隊として東安省虎林県宝東にあつたのです。陸軍記念日の昭和十六年三月十日、丸亀の補充隊で軍服に着替え、速やかに宝東へ、歩兵第十二連隊だけで人員は千三十一名が坂出―羅南を経由ということです。

他に徳島、松山、高知の歩兵と騎兵、砲兵、工兵、

これが二隻に分乗したが、蚕棚式の船倉の生活で直通六日ぐらいかかった。私は幹部候補生要員だったので引率者を命ぜられていて、責任は重かった。

宝東で、ウスリー江沿岸で困境警備をしながら、三か月の教育を受けた。目の前の河を隔てて対岸はソ連領でした。三か月の間に幹部候補生の試験があり、六月幹候、八月甲種幹部候補生に合格した。第十二連隊は古い連隊だったし、関東軍は最新鋭だったので訓練は厳しかったのです。特に甲幹ですのでお更でした。お陰でトップとすることが出来た。

昭和十六年九月一日、豊橋の予備士官学校へ第六期生として入校した。高師、天泊の演習場での訓練は特に厳しく、まして十二月大東亜戦勃発のため短縮されて昭和十七年三月三十一日卒業となり、直ちに原隊復帰、見習士官として宝東へ帰ったのです。

関東軍では暗号将校として特別教育を受けたが、関東軍奉天通信教隊という中野学校（諜報特殊将校教育学校）の分校でした。教育は暗号専門だが、他に諜報・スパイ、その他の教育をやっていた。その人たちは

民間の服装をしていたのだが、どういう教育をしていたかは極秘だったので私には判りません。服装も蒙古ソ連等それぞれの服装でした。

卒業は昭和十八年三月でしたが、卒業と同時に歩兵第十二連隊に復帰して、東安の第五軍司令部参謀部の情報主任参謀付電報班勤務として出向（参謀部には作戦、情報、後方と三つある）、第五軍の暗号係下士官の教官となって、東安の電信第二連隊での集合教育をしたのです。

当時の暗号は部隊暗号は三桁数字で表わし、陸軍暗号は四桁数字、暗号書に数で表わし、乱数表を非加減によって暗号文を作る。乱数表の使用には使用規定があり、三か月毎に更新する。

暗号は専門的、極秘なものなので次に「暗号について」示してみます。

一、暗号の種類

イ、隠語（有線、対話による）

実現する言葉を使って他の意味を表わす方法

例 鯨が三匹潜水艦三隻

桜が咲いたに展開完了せり

ニイタカヤマノボレに真珠湾に突入せよ

トラ、トラ、トラに我れ奇襲に成功せり

ロ・秘語（数字を使用し無線連絡）

部隊暗号（三数字使用）師団、連隊、大隊等で使用。

陸軍暗号四号（四数字使用）大本営、派遣軍、方

面軍、軍等で使用。

暗号書により秘語化し、使用規定（三、四か月で

更新）に書き乱数表を使用、非加減法で計算

電文作製。

ハ・特殊暗号

陸海共同暗号、航空暗号、氣象暗号、標識、光信

号、のろし等

二、暗号用語

イ・組立作業 送受信作業（通信隊）、翻訳作業、

判読作業（不明な所を判明にする特殊技能）

解読作業（敵国の暗号を傍受し解明する特殊技能、

解読班）

ロ・暗号掛将校（通信教育隊入校、電信班勤務、親展電報取扱、鳩班、軍犬班指導）

暗号掛下士官（師団通信、電信連隊で集合教育、電報班分隊長）

暗号兵（一期検閲後特業教育、電報班、通信中队配属、二年兵の中より師団通信出向）

ハ・関東軍奉天通信教育隊（中野学校奉天分校）満州第五四九部隊。奉天北陵、旧張学良軍官学校跡。

通信班、暗号班、諜報班（スパイ）、宣撫班、外语班等があったと記憶するが徹底した秘密主義のため他の班の行動は不明である。

暗号を発信、受信する時は暗号書使用規定に基づいて作業を行うが、受信し数字を普通文とするのは暗号係下士官で、秘密や極秘、機密は将校が解く。動員、将校の人事等は将校が解くのであります。

昭和十六年夏に関東軍特別演習があったが、第五軍はソ連進攻が目的なので国境に配備してあったわけです。大本営の方針は、戦局の悪化に伴い、北守南進と

いうことで、関東軍の南方や本土に転進する部隊が多くなったことは承知されている通りです。

私は、昭和十七年十一月少尉に任官をし、現役志願を進められました。師団では徳島第四三連隊の将校と私の二人だけが試験に合格をし、予備役から現役将校となっていました。

昭和十八年九月、航空兵に転科し十月中尉任官、東京立川の陸軍少年飛行学校へ区隊長として転属しました。そこで終戦まで、少年飛行兵第十六、第十八期生の区隊長、第十九・二十期生の中隊長代理となりました。

一区隊は第十六・十八期は六十名、第十九・二十期は四十名ですが、十六期の時は東京だけ、十七期は大津に出来、十九期以降は大分にも分校が出来ました。教育期間は一年、その間に生徒を操縦、整備、通信に適性、体力等により分ける。

卒業後は上級学校（専門）の操縦―宇都宮、整備―所沢、通信―水戸と進み、更に一か年教育を受け、更に適性検査がある。操縦でも、戦闘機（勇猛の者で、

単独で戦闘）。偵察（沈着、判断力、責任觀念旺盛）。

爆撃機は操縦、爆撃、通信、射手とあり大体七人で、九七式、一〇〇式、呑竜などがあり、爆撃は二〜三人で操縦と射手が爆撃を兼ねる。

整備は地上と機乗（重爆撃機）とある。通信も地上と機乗（重爆）とある。上級の専門学校を卒業して兵長となる。丸二年かかって、軍人となるが、学校在学中の生徒は準軍人である。

普通兵科と軽爆は牟田、太刀洗、戦闘機は明野で、第十六期生は昭和三年生れの十五歳で四月入校、第十七期生は九月入校で、前期と後期である。少年飛行兵学校は十六個中隊、一〜八中隊は第十六期、九〜十六中隊は第十七期生。従って十六期の次は十八期、十七期の次は十九期生となる。

学校の教育について述べると次のようであります。午前中は一般学科Ⅱ文官（学校の先生で陸軍軍属）

と、軍事学Ⅱ教育（典範令法）であり、午後は実科であった。実科の内容は、各個、分隊教練、両手軍刀術等であるが、体操には重点が置かれ、特に鉄棒、跳箱、

フープ（中へ入って廻る）、航空徒手体操（陸軍のとは違う）、グライダーの初級（プライマリー前にゴムがあり、パチンコ式に飛ばす）である。中・上級は上の専門学校でやるのです。

グライダーの中級はセコンダリーといって自動車で曳行（高度七十メートルで切り離す。三百六十度転回し元の所に帰って来る）。上級機はソアラーといって飛行機で曳航（高度千メートルで切り離す。滞空時間三十分）。ここまでくれば操縦技術は飛行機と同じになる。

その上の練習機が通称赤トンボ。教官が後に同乗して、操縦杆は二つついている。危ないと教官が直す。赤トンボで単独飛行が出来れば中練となる。これは実戦用の古い戦闘機で、優秀な者から戦闘機に乗るようになる。余り上手でないのは重爆機の副操縦士か、特別教育をさせる所に廻す。教育中、立川では余り事故はなかったが、宇都宮あたりでは、落下傘降下でたまには事故があったらしい。

第十六期生は全部伍長に任官し、実戦に出て、特攻

隊、振武特攻隊として突入した者もいたし、部隊によつては特攻に入らなかった者もあった。特攻は知覧が基地で、今年（昭和十九年）に死んだ者の五十年忌になります。

私が教育したのは第十六期もいたが、第十八・二十期だったので、直接教育した者の中で実際に突込んで死んだのは六名、満州でソ連機と戦って死んだ者は一人でした。昭和二年生れの第十四、十五期生はほとんど振武隊の中心となって突込んでいる。階級は軍曹でした。

毎年第十六く二十期生が全国大会を開いている。今年（平成五年）は第十六期生が熱海で大会をしています。第二十期生は、昭和二十年八月一日で入校し、十五日には終戦となったのですが、今も連絡して会をやっています。

終戦の時、私は立川の学校でした。当時は学校の警備隊長となった。高射機関砲一個小隊が配属となっていて、各中隊と有線連絡をする等が警備隊長の役目でした。第二十期生は四月入校の予定が八月一日になっ

たので、その空白期間に警備隊長をやったわけです。

それから暗号が出来たからでもあったのでしょう。

終戦の時は十六棟あった施設を一つ宛間引きし、棟数を半分として空襲の被害を防いだり、その間を防空壕にしたりした。従って教育は武蔵野の林の中で露天教育していた。空襲を受け死んだのは曹長である班長と炊事係傭いの婦人の二人で機銃掃射のためです。

飛行隊の生徒は八月二十日頃は、ある物を持てるだけ持たせて、生徒はまだ少年ですからそれぞれ将校が引率して停車場司令部と連絡し、汽車を配備してそれぞれ家へ帰しました。マッカーサーが上陸するので、一番危険な航空関係部隊は早く復員を命ぜられたからです。

私等は、一部残務整理要員を残して八月中旬に一時家へ帰ったが、また呼び出されて学校へ帰り秘密書類を持って家に帰った。特攻関係者は戦犯にはならなかった。航空兵時代のことですが、私等、第十一師団の三名の現役志願将校は、佐官級将校丁種学生候補になるよう勉強せよとの訓辞を受けていました。沢山の少年

航空兵を教育したが、特攻を決意した当時の少年も今では六十数歳になり、会合の度に昔の精気を感じ、感無量であります。

【解説】（参考資料）

◎東京少年飛行学校の編成は次の如くである。

第一教育隊（第一～第八中隊）一個中隊は四区隊、一区隊は二班、第二教育隊（第九～第十六中隊）。偶数期生徒は毎年四月入校、奇数期生徒は九月入校。

◎学校の卒業実習

①実弾射撃、習志野における班長（軍曹）指揮の分隊、野戦陣地攻撃。

②野戦軍装による中隊一〇キロ行軍。

◎終戦時の少年飛行兵学校

①立川—東京陸軍少年飛行兵学校（関ヶ原より東の各都道府県出身者）

②大津—天津陸軍少年飛行兵学校（関西、中国出身者）

③大分—大分陸軍少年飛行兵学校（四国、九州）

◎学校防衛について。房総沖に進出した空母よりグラ

マンF5、F6の銃撃と、B29の空襲より生徒の安全を守るため防衛隊編成。

①校内並に周辺武蔵野の林に防空壕作成（十九期生）

②火災の延焼を最小限にするため、校舎を寸断、半

減取壊し開始。このため昭和二十年四月入校予定の第二十期生八月入校、十九期生繰上げ卒業。

③編成

防衛隊長―第一教育隊長。救護隊長―高級軍医。

食糧隊長―高級主計。

消防隊長―先任中隊長・週番司令。

防空隊長―鎌倉中尉（有線、暗号）。

指揮班（少尉1、下士官2、ラッパ手2、衛生兵

2）。通信班（下士官7、伝令5）。

防衛班（配属高射機関砲一個小隊）。

自衛班―各中隊下士官全員（約十五名）軽機・小

銃で対空応戦。

事務室―准尉以下、下士官・兵は中隊長直轄連絡

係・記録・補充要員。

◎復員業務

①生徒を安全かつ早期に復員さすため第一目標八

月二十日最終。八月二十五日を目標に中隊長代

理として命に従い、東京停車場司令部で日夜交

渉、列車を確保。

②マッカーサー厚木到着までに将校以外中隊付全員復員完了。

③残務整理での一番の困難と苦労は周辺の民家の

土蔵を借りて疎開していた兵器・被服・陣営具

・物資等の集積・処分と、中隊の考科表・兵籍

名簿等の整理。米軍進駐後を予想しての流言蜚

語による将校以下の動揺と指揮系統の乱れ等

であったように記憶している。

五十年近い追憶と統率権を持たない指揮権のみの下

級将校の知り得た情報と判断には、多少の誤りがある

事は事実であると思う。

（鎌倉氏の述懐）